

ガンコ親父の



奄美黒糖焼酎

松次郎は昔から祭りが大好きだった。中学・高校時代の祭りの前日ともなれば、勉強はもう全然手に手がつかなくなっていた。もちろんでも、筋金入りの花火好きは全く変わっていない。「おとうさん、今年はまた赤ちゃんも小さいし、私たちは残念なことにバスに乗る。花火にはおかあさんと一緒に行かれませんか？」と花菜が言った。そう、そう、最近二人で出かけることもないし、ちょっといい機会だよな」と、息子の学も勧めた。

長年連れ添ってきたとはいつもの、二人連れ添った花火見物は久しぶりだった。しかし、会場で座り込んだ後、松次郎は花火が始まる直前について居眠りをしてしまった。会社で退職者が出て、仕事が多忙となり、過労気味だったのだ。松次郎はすぐに夢の世界に引き込まれ、現れたのは高校時代の夏休みだった。

その夏、松次郎は悪友達の誘いを断り、密かにひとりの女生徒を祭りの花火に誘った。誘った相手は、短距離走をやっていた松次郎のレース時には、そのグラウンドに必ず姿を見せていた女生徒だった。自分の兄を見に来ていたその娘のことを、松次郎は自分のファンに違いないと勝手に思い込んでしまっていたのだ。昔、女性の前では緊張してしまう松次郎も、なぜかこの時はかりは様子が変わった。短距離走と同じように、その女生徒に向かって、脳目も振らずに突っ走ってしまった。息を荒げてはっはっ、花火、見に行きませんか？」悪友達にバシないようにと、当日はいつもの花火見物の集合時間と見る場所を思いっきり変えてみた。

そして花火の最中、松次郎は暗がりの中で思い切った。その女生徒と手を握らないでみた。花火の音がドンと鳴るたびに、若い松次郎は隣の女生徒の手のひらの存在も加わり、素晴らしい青春の緊張感を味わうことが出来た。終わりが近づくと、後ろに座っている男達の声が聞こえてくる。何やら聞き慣れた声だった。その瞬間、全身に嫌な緊張感が走った。まさか？と思ったが、後ろを振り向くわけにはいかない。

松のヤツ、まさか花火デートでもしているんじゃないだろうな？俺たちに内緒で、それは無いと思う。どこかかという、女性恐怖症だもんな。それに嘘をつくヤツでもない」と二人の男の音が聞こえる。

松次郎は固まったまま、前を向いていた。きこえない松次郎に、女生徒は「松次郎さん、今日はありがとう。さよまた」と出してももらいたくない名前を、はつきり口に出した。松次郎の額を、とっさの冷汗が流れた。やばい。

ドンと大きな破裂音が聞こえた。夢の中の冷や汗で目を覚ました松次郎は、つないでいた手にさらに驚き、サッと離してしまっ。悪夢のおかげで手のひらが汗ばんでいる。つないでいた手を解かれた貴代は「何年ぶりですかね、お父さん」と言った。「そういえば、あの花火の日、手を握ってくれたの、今でも憶えていますよ」と貴代が言った。やつは、花火はいいな。帰って飲む今夜の、しまっちゃん伝蔵」はまた格別かもしれない、と松次郎は少し照れながらそう思った。

25度
好評発売中



喜界島酒造株式会社
鹿児島県大島郡喜界町赤連296番地12
☎0997(65)0251



喜界町
奄美市



900ml (25度)



1800ml (25度)



1800ml (25度)

昔ながらの手造り
こだわり焼酎
喜界島の豊饶な大地の恵と豊かな自然の中で、永年の伝統に受け継がれた製法でじっくりと醸しあげた「しまっちゃん伝蔵」黒糖焼酎の味を全面に出し昔ながらのコクのある味と香ります。

2014年春季全国酒類コンクール・黒糖焼酎部門第1位受賞

花火に乾杯！

<http://www.kurochu.jp>

お酒は20歳になってから。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児に悪影響を与えるおそれがあります。